

# 范本梁アナーキズムの思想史的水脈をさぐる

—— 幸徳秋水と大杉栄を手がかりに ——

セ ン 亜 訓

## 1. はじめに

第一次世界大戦後、帝国秩序の再編と民族自決の高揚を背景に、日本と台湾では改革を求める声が盛り上がり、社会各層においても多様な社会運動が登場した。大戦を経験し、日本資本主義は金融資本独占体制の形成と軍需産業・植民地経営の拡大、都市中間層の増加といった資本と産業、人口の構造が大きく変動する段階に入った<sup>(1)</sup>。こうした変化は日本で米騒動と悪税反対、普選運動、労働争議、農民組合運動などの大衆運動を引き起こしたとともに、海外と植民地においても五四運動と三一運動のようなナショナリズムの台頭と帝国の資本進出に対する反発の口火となった。この時期、台湾ではタパニー事件<sup>(2)</sup>につづき、文化啓蒙と議会設置請願運動、プロレタリア運動、アナーキズム、農民組合といった大衆運動が植民地支配への対抗を複線的に試みた。

台湾の政治・社会運動にかんして、上述した潮流に加え、大正デモクラシーと新カント主義による文化主義に触発された動きとする見方が一般的である<sup>(3)</sup>。そのなかで、資料の欠乏などの原因で植民地台湾アナーキズム運動についての思想史研究は僅少である<sup>(4)</sup>。こうした研究状況をふまえ、本稿は現在知られる限りで台湾出身の最初のアナーキスト—— 范本梁(1897-1945) ——を取り上げる。世界大戦後の思想状況に着目した分析手法と異なり、本稿は明治末期にさかのぼって幸徳秋水の帝国主義論と直接行動論、そして大杉栄の征服の事実を手がかりにして帝

国日本と植民地台湾アナーキズムの思想史的水脈をたどる。

第一次世界大戦前後、第二インターナショナルの弱体化とボルシェヴィズムの台頭につれ、欧米およびアジアのアナーキズム運動全体では潜行化の傾向が見られた。また、世界中多くのアナーキズム運動が共有した反権威と脱中心化の思考によって、匿名や共同執筆という個人が特定されないような手法で運動を広げた事例が多かった。その結果、移動の記録や組織のネットワーク、史料と研究対象のつながりが確認しにくいという課題は現在でもアナーキズム研究に残っている。

こうした状況のなか、ダーリック(Arif Dirlik, 1940-2017)は初期社会主義の文脈から中国のアナーキズムとマルクス主義を取り上げ、両者が共有していた革命的言説とソーシャル・ラディカリズムの性質を析出する。分別視するのではなく、その同時展開を強調する視点から、彼はアナーキズム研究を広義の社会主義運動の歴史と参照しながら、東京の社会主義研究会<sup>(5)</sup>とパリの世界社の重要性を指摘し、中国のアナーキズム運動を描いている(Dirlik[1991: 10-14])。日本のアナーキズム運動について、クランプ(John Crump, 1944-2005)は無政府共産主義とサンジカリズム、ナロードニキ・テロリズムの三つの側面から明治日本における社会主義とアナーキズムとの連続性を捉える。そのうえで、明治アナーキズム思想の核としては、ロシア社会革命党とアメリカのサンジカリズムなど、イデ

オロギーとしてのアナーキズムと必ずしも一致しない部分からなると指摘される(Crump[1996: 17-29])。同様に、梅森直之は日本におけるアナーキズムとマルクス主義の同時伝来に注目し、後に資本主義への対抗姿勢と社会運動の主体化をめぐる認識の違いによって対立構図が形成したと論じる(梅森[2016: 38-41, 246])。

ほかにも、東アジアにおけるアナーキズムの思想と行動の展開に着目し、ローカルな文脈から国別研究を進める手法がある<sup>(6)</sup>。また、横浜直接行動グループやタパニー事件に注目し、エスペラント運動とアナーキズムとの密接な関係から人物や団体の研究を展開する研究も分析視野を広げている<sup>(7)</sup>。そのなかで、邱士杰はダークリックの議論をふまえ、1920年代初頭台湾の社会主義運動におけるAB連携(アナ・ボルという略称による表現)の特徴に注目し、トランスナショナルな視野からいわゆる黎明期社会主義思想の展開と転回を語る(邱[2009: 4-20, 124-125])。彼はアナーキストとエスペ란ティスト、社会主義者の間で結成した越境的な連帯から范本梁の思考と行動を扱う。范のアナーキズムの受容とそのインパクトにかんして、東京のコスモ倶楽部<sup>(8)</sup>と上海の東方無政府主義者聯盟、華北の台湾人大会が取り上げられるとともに、范が導いた新台湾安社と『新台湾』は台湾に限らず、日本と朝鮮、中国との交流の文脈から検討される(ibid: 122-153)。邱の分析によると、激しい弾圧にさらされていた范はAB連携を拒否し、一匹狼の独自路線を取り、アナーキズム暴力論に内在する革命の契機に献身したという(ibid: 134-141)。そのうえで、彼は東アジアの視野から台湾のアナーキズム研究を深め、范との交流を持っていた申采浩(1880-1936)と林炳文(生没年不詳)の朝鮮と中国での活動の軌跡をほりだし、さらなる研究を進めた。(邱[2017: 79-82])。

上述した先行研究をふまえ、東アジアの文脈と広義な社会主義運動の側面から検討する必要

を意識しながら、本稿では思想史の側面を重視し、東アジアのアナーキズム研究のなかでつねに言及される一方、その思想にかんしてまだ一般的な叙述にとどまった范本梁のアナーキズムを再考する。以下では『新台湾』の創刊宣言を切り口に、帝国主義論と進化説、易姓革命、征服の事実、暴力論といった流れで、幸徳秋水と大杉栄の論理を手かがりにして范の思想形成をさかのぼり、彼のアナーキズムのポテンシャルを示す。これにより、社会主義研究会や横浜直接行動グループ、コスモ倶楽部のほか、台湾アナーキズム運動の思想受容のルートを20世紀の変わり目の帝国主義論に求める。そのうえで、植民地の思想史研究の分野で比較的扱われていない幸徳思想と大杉思想の役割を把握する。最後に、方法上いままでも思想史的意義が明確にされていない植民地台湾のアナーキズムを探究する可能なアプローチを立てることにより、東アジアの帝国と植民地研究の分野に関連する研究に寄与する。

## II. 范本梁のアナーキズム

范本梁は1897年に台湾の嘉義で生まれ、故郷では「鉄牛」の称号で知られたアナーキストである。彼は1915年タパニー事件前後渡日し、青山学院と茨城土浦の中学校、上智大学に順次進学していた。1920年にサンジカリズムの会合とコスモ倶楽部に出入りして以来、大杉思想に共鳴しはじめたと考えられる。翌年6月、彼はコスモ倶楽部が「人類愛的結合」を題目に東京の神田青年会館で主催したサンジカリスト系の社会問題講演会で台湾解放を唱道した。この行動が「不穩演説」とみなされたため、范は一時的に拘束された。釈放された後、彼は北京に移動し、景梅九(1882-1961)が導いたアナーキズム団体の北京安社<sup>(9)</sup>に加わり、山鹿泰治(1892-1970)と李会栄(1867-1932)、申采浩等のアナーキストとエスペランティストとの交流を持ち、北京と

上海で活動していた<sup>(10)</sup>。1923年に彼は北京で新台湾社を創設し、翌年、みずからのアナーキズムの旗を掲げ、新台湾社を新台湾安社と改称させたとともに、機関紙の『新台湾』(*La Nova Formoso*)を発刊した。資金難と奉天派の軍閥からの弾圧などの事情で、范は1926年に帰省し、台湾でアナーキズムの革命運動を広げようとしたが、まもなく治安維持法により検挙され、5年の禁錮の刑に処された<sup>(11)</sup>。1931年に彼はふたび治安維持法違反で15年の重刑が科せられ、1945年に獄死した。

生涯のほとんどが監視と弾圧、禁錮の嵐のなかで過ごした范は外務省と台湾総督府の記録によれば、台湾における「暴動的革命」を叫んだ危険人物であるという。一方、知人の回想のなかでは行動力が高く、情熱的に弁舌をふるう姿が見える<sup>(12)</sup>。こうした印象の背後に流れていた思想にかんして、1920年の「結婚の改善を絶叫す!!」、1924年の演説「大杉栄を追慕する」(原題：追慕大杉栄先生)、1923年から1926年にかけて全3号が刊行した『新台湾』、1926年の「獄中瑣言」などのほんのわずかな出版物しか残っていない<sup>(13)</sup>。

そのなかで、范思想の中身をうかがえる手がかりとしてあげられるのは、1923年にリーフレット形でくばられた『新台湾』創刊の宣言である。この宣言にかんして、中国語の原文および台湾総督府警務局の記録に残った日本語の訳文とそれをもとに翻訳し直された中国語の復文の三つがある<sup>(14)</sup>。檄文として、およそ4,000字程度の范本梁の論説は世界弱小民族の生存、近代における人間的価値の圧殺、社会進化の概略、帝国主義と植民地支配の問題、民族自決への疑問、暴動的な社会革命の主張、ボルシェヴィズムとの峻別、トランスナショナルな決起といった問題設定と課題からなっている。

まず、宣言の冒頭では「現在大多数の台湾民衆は世界弱小の民族と一様に無聊、悲苦、迷信、

暗黒、暴虐、圧迫を避けんことを希ふ」(台湾総督府警務局(編)[1939: 878])という状況が述べられている。そのうえで、平和と幸福、真理、光明、正義、自由などの人間の天性と社会進歩の土台となる価値の圧殺が示される。そして、范は「政府が人として当然享くべき一切の自由を剥奪し、資本家が人として当然享くべき自然の財貨を独占」(ibid: 878)した問題点を指摘し、その原因について、以下のように述べている。

而して之等〔姦淫誘拐と鬪墻盜奪、侵略戦争、差別、経済的不平等、権利の偏頗などの問題〕の総てが国家、政府、官僚、軍閥、貴族等強者の罪惡であり、資本家、地主、工場主、銀行家及び貨幣を集積する盗人の罪科であり、総てが権力の存在と私有財産制度維持の齎す必然的惡果なることが判明した(ibid: 879)。

こうした問題認識は范に「社会発達史」が明示した諸「事実」と呼ばれ、近代において人間の生存に迫ってきた状況とされる。宣言の構成と表現のみならず、彼の思考様式には幸徳が『社会主義神髓』(以下は『神髓』)のなかで描いた産業革命以降の社会像と、大杉が「征服の事実」の論理で示した近代社会における対立の両極化の類似性が見られる<sup>(15)</sup>。唯物史観を切り口とし、范は「自然の法則」にしたがった共居・漁獵時代、「奴男隸女の惡風」、「遊牧粗農の部落制度」、「貯蓄及利息の觀念」などの叙述でマルクス主義の公式の原始共産制・奴隸制・封建制・資本制という思考様式を述べている。そして、資本制の段階に達した近代社会は、家族制度と階級、民族の対立に基づいた国家主義<sup>(16)</sup>の形成につれて、最終的に「現代の怪物侵略的帝国主義の出現」にいたったと、彼は訴えている(ibid: 879)。

この表現は、幸徳の『帝国主義』(原題：

二十世紀之怪物帝國主義)で知られる「二十世紀の怪物」の表現を想起させる。また、『帝國主義』の抄録と書き換え(紙幅の都合上、註でまとめる)によって、范は帝國主義を「迷信的愛國心」と「狼虎の如き軍國主義」、「專制政治家の圧迫」、「安逸の資本家の横暴」の四点から定義する<sup>17)</sup>。そのうえで、「弱少の被征伏民族の輩出」と「最大多数の民衆の困窮」という状況の深刻化への懸念が表明される。また、「現代の怪物たる侵略的帝國主義は多数民衆の勞苦、悲慘を顧慮」せず、「私欲の満足の爲めに他の國土を侵略し他國の財貨を掠奪し他國の人民を殺戮」するという状況も激しく非難される。こうした視点をふまえ、范は朝鮮と台灣における植民地支配を「二十世紀の怪物たる侵略帝國主義、國際的資本主義から來た併呑であり、霸占である」と位置づける。

そして、范は台灣の議會設置請願運動をふくめ、第一次世界大戰後植民地で起きた民族自決・獨立運動や日本の普選運動などの改革の動きを疑問視する。これらの運動について、彼は「暴を以て暴に易ふるの運動であつて、小數〔少数〕資本家及有資階級の壟斷」に利用されやすく、辛亥革命とボルシェヴィズムと同様に不徹底的かつ誤った動きと考える(ibid: 880-881)。

愛國心と軍國主義、資本主義などの要素からなる帝國主義論の筋道から考えると、幸徳の帝國主義論を容易に想起させる。さらに、暴を以て暴に易うというのではなく、范は「暴動的アナキズム」と「暴動的社會革命」、「科學的アナキズム」を提起し、帝國主義との対決を求めている。その理想像にかんしては次のように語られる。

我等は少数人の國家を變じて多数自由人の國家とし陸海軍の國家をして農工商人の自由組織の社會とし、資本家横暴の社會をして勞働者共有の社會とし軍人を生産的農工商人と

なし、少数人独占の私有財産制を變じて多数人の共同財産となし、……世界を家と爲さしめ、無宗教無迷信を主張し一切の不正不義、非文明、非科學、非人間的邪説を改造し、総べて斯民の幸福、自由人の福利としなければならぬ(ibid: 881, 傍点筆者)。

この段落で、范は幸徳が『帝國主義』で提起した「多数の國家」、「農工商人の國家」、「平民自治の社會」、「労働者共有の社會」の社會主義的理想を用いている<sup>18)</sup>。そして、平民自治は、「斯民」、「自由組織」、「自由恋愛」、「自由の独居」、「多数自由人」などの表現で描き出され、一人ひとりを包摂した共同生存の理想が掲げられている。最後に、幸徳の帝國主義批判に应じて、范は同様に世界主義を唱道する一方、十月革命以降のボルシェビキ政權への懸念を念頭に、科學的社會主義の代わりに科學的アナキズムを主張した(ibid: 881)。

まとめると、まず、『新台灣』の宣言には幸徳の『神髓』と『帝國主義』における資本主義と帝國主義とのかかわりをめぐる議論と、大杉の「征服の事實」に近い見解が見られる。次に、專制政治と被征服民族の状況が指摘されたが、征服／被征服の位相から捉えられた植民地問題の視野は大杉の問題関心につながっている。そして、このような論理の連続性は范の植民地支配論の基盤となつてると同時に、社會主義からアナキズムへ傾いたという思考展開にもかかわる。さらに、暴を以て暴に易うという易姓革命への懸念と、范が掲げた暴動的・科學的アナキズムとの間には、反復としての暴力と反逆としての暴力というreproductionとinsurrectionの対立構図が存在すると考える。

### III. 帝國主義論の軌跡

上述した幸徳と大杉の思想とのつながりは1920年代いわゆる植民地・半植民地で展開した



范のアナーキズムにどのような影響を与えたのか。大逆事件と戦前から戦時中そして戦後の社会主義に対する検閲によって、1910年から1952年まで、幸徳秋水の著作は、発売禁止や字句の削除の処分となっていた<sup>19)</sup>。そのため、1950年代まで、思想的に『帝国主義』を扱う研究はほとんどなかった。幸徳思想を再考するアプローチにかんしては、初期社会主義と初期アナーキズム、そして非戦論から検討することが一般的である。そのなかで、幸徳の『帝国主義』は非戦論を固く守った立場と、ホブソン(J.A. Hobson, 1858-1940)とレーニン(Vladimir Lenin, 1870-1924)の帝国主義論よりはやく登場したという先駆性から評価される。一方で、日本資本主義に対する認識が浅いと批判されるとともに、思想としての価値も疑われている<sup>20)</sup>。また、社会革命における階級認識の重要性を見逃した問題点と、植民地の視座の欠如もつねに指摘される<sup>21)</sup>。

こうした見解にたいして、植民地への問題関心をきっかけに、あらためて幸徳思想を検討する研究は、平民社と亜細亞和親会、朝鮮の独立運動を視野に入れ、トランスナショナルな連帯の側面をも重視する。梅森はネグリ(Antonio Negri)とハート(Michael Hardt)が語るマルチチュード(multitude)を用いて、遍在した平民社同人の動きから幸徳思想における「平民」の概念を考え直す。そのうえで、帝国主義との対抗を背景に、彼は非国民の立場において安重根の行動と照応した平民社の非戦論を、越境的な観点から再定位した(梅森[2016: 104, 119, 133])。また、李京錫は亜細亞和親会に着眼し、帝国と植民地・半植民地の緊張関係を越えた越境的な連帯に寄与した平民社の役割を強調する。李によると、朝鮮とベトナムの運動家が共鳴した幸徳と大杉の思考は亜細亞和親会がアジアにおける「社会主義のアキレス腱」となった要因であるとする(李[2005: 101-104, 111-112])。同様に、ティア

ニー(Robert T. Tierney)は亜細亞和親会に基づいた連帯を取り上げ、帝国主義への問題関心をアジアの共同体観の基盤として捉えている(Tierney [2015: 121-122])。それにとどまらず、彼は非戦論の土台となった幸徳の帝国主義論を重視し、朝鮮独立運動と大逆事件(難波大助、朴烈の場合を含む)を手がかりに、幸徳思想における植民地主義論のポテンシャルを提示した(ibid: 129-131)。これらの観点をふまえ、以下は『帝国主義』と『神髓』、『新台湾』の宣言との連続性から見えてくる幸徳思想の軌跡を明示したうえで、范のアナーキズムを検討する。

### III.1. 愛国心・軍国主義・資本主義の三段論法

1901年に出版された『帝国主義』のなかで、名文句の「帝国主義はいわゆる愛国心を経となし、いわゆる軍国主義を緯となして、もって織り成せるの政策にあらずや」(幸徳[2013: 19])の通りに、幸徳は愛国心と軍国主義から古来より存在する帝国主義の本質を見抜いている。そのうえで、資本主義分析に基づき、近代的帝国主義の性質にかんしてはナショナリズムと資本主義発達から指摘される(ibid: 103, 106-107)。

まず、愛国心にかんして、幸徳は自利と好戦の動物的天性を愛国心が成立する前提として捉えたうえで、政治的領域にける自他分別が友敵対立のベースとなるにともない、愛国心が「故郷に対する醇乎たる同情惻隠にあらずして、他郷に対する憎悪なり」と指摘する(ibid: 21-22)。すなわち、愛国心とは普遍的な愛の一形式でなく、他者との分別を前提とした、排他に基づく感情の構造なのである。

社会が適者生存の法則に従って、漸く進出し発達し、その統一の境域とその交通の範囲もまたしたがって拡大するに至るや、その公共の敵とせる異種族、異部落なる者、漸く減じて、彼らが憎悪の目的また失わる。……而

して姑息なる政治家や、功名を好むの冒険家や、奇利を趁うの資本家は、(中略)実に個人間における憎悪の心を外敵に転向せしめて、……而してこれに応ぜざるあれば即ち責めて曰く、非愛国者なり、国賊なりと。知らずやいわゆる帝国主義の流行は実に這箇の手段に濫觴せることを、いわゆる国民の愛国心、換言すれば動物的天性の挑撥に出でたることを。(ibid: 28-29)

こうした論理のなかで注目したい点は二つある。一つは、適者生存という進化の法則から始まり、異なるものの統一を経て、動物的天性に帰着するという論法における適者生存から弱肉強食への転回である。もう一つはこうした転回のなかで愛国心が置かれた国民／外敵・非愛国者・国賊の対立関係の形成である。そのなかで、政治家と冒険家(投機者)、資本家らは国民／外敵や国民／国賊という内外における対立の枠が形成し、他者に対する憎みを外敵へ、さらに国賊へと広げていくアクターと考えられる。それにより、社会進化の過程は折り返されたように動物的天性に還元された。幸徳は、愛国心は社会進化の原動力にならないため、「人は自ら奮って自然の弊害を矯正するが故に進歩あるなり」(ibid: 49)と述べた。つまり、社会を進化させるには人間による変革が必要であると主張しているのである。

次に、日清戦争から義和団事件までの五年間を背景に、幸徳は人道と正義の名のもとに提唱された軍国主義を非難し、軍備拡張を支えた国富説と秩序平和説に反論する。彼の分析によると、国力を増強するために、軍拡は当面の急務だという国富説は実に軍人の好戦と資本家の投機、国民の愛国心の三つによって構成されるものである<sup>23</sup>。また、平和の概念がすでに軍国主義に導入され、戦争の概念と矛盾するものの、互いに依存するという状況が指摘される。さら

に、「平和の確保より平和の攪乱となるは僅かに一転歩のみ」(ibid: 83)という平和の曖昧さが述べられる。それに、幸徳は戦争と国家生存とのかかわりを疑問視する。彼にとって、戦争をつうじて国家間の紛争を解決することは近代的なものでなく、昔から存在する手段である。手段としての戦争は独裁と暴力の悪循環を迎えるしかないと、彼は考えている。最後に、交戦した国々とその人民がともに倒れ、終わりのなき戦争状態に陥ってしまうと、注意が喚起される<sup>24</sup>。

資本主義の問題にかんして、幸徳はイギリスのニュー・リベラリストのロバートソン(J.M. Robertson, 1856-1933)の考察を用いて、独占と過少消費、配分の不平等などの問題を語っている。帝国主義・植民地戦争が頻繁に起きた時代に、領土拡張をめぐる議論では、一国の資本主義の発展が成長の頂点に達すれば、必然的に海外市場の需要が生じるという見方が一般的であった。このような過剰説にたいして、幸徳は欧米の事例を参照したうえで、人口を理由にして戦争を起こして領土を獲得しようとした帝国主義を非難する。また、資本過剰説にたいして、彼は帝国主義による諸問題をあらためて独占と富の再分配の視点から論じる。この時期幸徳の帝国主義認識のなかで、根源となるのは経済と社会の仕組み、利益の分配である。既存のシステムが変わらない限り、いかなる領土を獲得しても問題は改善しないと論じられる<sup>24</sup>。

彼ら〔帝国主義者〕は何をもって新市場の開拓を必要とするや、曰く資本の饒多と生産の過剰に苦しめばなりと。……彼らが生産の過剰なるは、真にその需用なきがためにあらずして、多数人民の購買力の足らざるが故のみ、……実に現時の自由競争制度の結果として、彼ら資本家工業家がその資本に対する法外の利益を壟断するがためにあらずや(ibid: 102-103)。

こうした認識のなかで、帝国主義の問題は単に戦争か平和かということに関係するのではなく、また単なる人道の危機でもない。先述したように、問題なのは大衆の感情構造と経済の体制、政治の仕組みとの絡み合いである。これらの状況をうけ、幸徳は大規模な変革を求め、帝国主義に歯止めをかけようとした。ゆえに、彼はフランス革命のスローガンである「自由・平等・博愛」を掲げ、「現時の自由競争制度を根本的に改造して、社会主義的制度を確立するためにあらざるべからず」(ibid: 103)と唱え、帝国主義との対決を試みた。

少数の国家を変じて多数の国家たらしめよ、  
陸海軍人の国家を変じて農工商人の国家たらしめよ、  
貴族専制の社会を変じて平民自治の社会たらしめよ、  
資本家暴横の社会を変じて労働者共有の社会たらしめよ。……而して後  
ち正義博愛の心は即ち偏僻なる愛国心を压せんなり、  
科学的社会主義は即ち野蛮的軍国主義を亡さんなり、  
ブラザー・フードの世界主義は即ち掠奪的帝国主義を掃蕩  
芟除することを得べけんなり(ibid: 117, 傍点筆者)。

ほとんどが『新台湾』の宣言に抄録されたこの段落では、多数の国家、農工商人の国家、平民自治の社会、労働者共有の社会の理想像が掲げられる。そして、共和主義の伝統の下で「ブラザー・フード」が唱えられると同時に、愛国心・軍国主義・資本主義の三つの要因からなる近代帝国主義批判としての科学的社会主義が主張されている。この意味で、彼が語る世界主義とは共和主義と社会主義を組み合わせた発想であり、コスモポリタンな理想なのである。

### III.2. 『社会主義神髓』と『新台湾』宣言における進化説の連続性

范の資本主義・帝国主義認識とアナーキズム

の理想像を支えた論理について、幸徳の『神髓』から検討する。『神髓』は一般に科学的かつ体系的に社会主義を把握した作品と言われ、明治期マルクス主義の認識がたどり着いた一つの到達点を示した代表的な文献とされる<sup>28)</sup>。周知のように、幸徳は本書のなかで唯物史観と生産力・生産機関・生産様式、剰余価値説、産業予備軍、階級の対立、経済恐慌といった一連の論理をつうじて、マルクス主義の問題認識から資本主義を捉えている<sup>29)</sup>。一方で、社会進化の問題にかんして、彼はプロレタリア独裁の思考との距離を置き、「一切の生産機関を地主資本家の手中より奪ふて、之を社会人民の公有となす」(幸徳[1903: 21])と主張する。プロレタリア独裁から社会人民の公有に変わる理由について、幸徳は「進化の法則が自由競争を次なる形に、すなわち社会主義的競争に変わっていく」(ibid: 94)と期待し、進化の法則としての競争自体が進化すると主張する。こうした視座をつうじて、「社会主義を以て競争を廃止する者となすと勿れ、社会主義は衣食の競争を廃止す、而も是れ更に高尚なる智徳の競争を開始せしめんが為めのみ」(ibid: 94)という社会主義の理想への道程が描かれている。しかし、資本主義の自由競争にたいして、「高尚なる智徳の競争」とは何だろうか。

社会主義は国家の保護干渉に頼る者に非ざる也、少数階級の慈善恩恵に待つ者に非ざる也。其国家や人類全体の国家也、其政治や人類全体の政治也。社会主義は一面に於て実に民主主義たる也、自治の制たる也(ibid: 91-92)。

彼にとって、社会主義とは国家の保護干渉と少数階級の慈善恩恵から脱して、人類全体の自治というデモクラシーの制度をいうのである。すなわち、競争の本義はもはや争いではなく、人類全体での共有なのである。この意味で、

『帝国主義』で提起された社会主義の理想は、幸徳流の社会進化説によってさらに共有としての自治・デモクラシー論と展開した<sup>27)</sup>。

范が唱えた科学的アナーキズムの理想像に比べると、「平民」の概念は「弱少数民族」や「斯民」、「多数自由人」などの表現に変化したが、帝国主義批判に基づいたコスモポリタンな共有は受け継がれた。同時に、ボルシェビキの中央集権への非難から考えると、范は幸徳と同様に唯物史観から歴史の進化を語っていたものの、プロレタリア独裁への抵抗感を持っていた。そのため、階級闘争の公式を超える意欲は幸徳と范のあいだで共通感覚として存在したともいえる。また、『新台湾』の宣言のなかで「斯民」や「多数自由人」の幸福が示した一人ひとりを包摂した共同生存という理想像は、『神髓』における高尚な競争に基づいた人類全体の共有に共鳴している。そのため、十月革命とアナ・ボル論争を背景に、范が科学的アナーキズムに傾倒した理由を、直接行動論だけでなく、『神髓』のなかで登場した社会進化の解釈のなかに読み取ることができるのではないか。

#### IV. 直接行動論と征服の事実

日露戦争期愛国教育と軍国主義の政策を批判した文章の刊行によって検挙され、1905年に禁錮の刑を言い渡された幸徳は出所した後一時渡米し、それ以来直接行動論の媒介で社会主義からアナーキズムに傾いたと言われる。こうした変化をもたらした要因にかんして、アメリカでのサンジカリズム系団体との交流と第二インターの弱体化、ロシア第一革命、クロポトキン(Peter Kropotkin, 1842-1921)の思想、国際アナーキスト大会の決議による影響があげられる<sup>28)</sup>。それに加えて、以下は前述した社会進化の解釈がどのように幸徳に受容され、直接行動論を接点に大杉と范の科学的アナーキズムに結晶したのかという課題を検討する。

##### IV.1. 直接行動論から人民の中に

幸徳の入所と平民社の解散をうけて社会主義の試みはいったん頓挫したが、翌年に直接行動の旗が掲げられたことにともない、運動はさらにゼネストを中心に革命運動の勢いに乗って展開した。明治憲法のもとで、議会が一般人とほぼ無縁だったということを背景に、幸徳は議会議政策論から離れ、「我日本の社会主義運動は、今後議会議政策を執ることを止めて、一に団結せる労働者の直接行動を以て其手段方針となさん」と述べ、「総同盟罷工が階級戦争に於ける最後の手段たる」という直接行動論を主張した(幸徳[1975: 286, 294])。同時に、彼はクロポトキンの*The Conquest of Bread*の日本語訳を刊行したうえで、相互扶助の原理を繰り返していた<sup>29)</sup>。また、ロシア第一革命に対する観察からは、ゼネストの重要性が強調されるとともに、政治上と経済上の革命の同時発生も重視される。

是れまで何国の歴史でも政治的革命が先づ完成して然る後ち経済上の革命運動が始まつて居る、……独り露国に至つては民権自由の革命と社会主義の革命とが同時に來たので、個人的腕力手段と社会的の同盟罷工とが同時に用ゐられて居る…(幸徳[1971: 256])。

すなわち、彼の論理のなかで、ブルジョア革命を経て資本主義が一定のレベルに達してから社会主義革命が出てくるという論理と異なった革命の可能性が注目される。そのため、マルクス主義の革命観にしたがうのに対し、幸徳思想は二種の革命の同時発生に帰結する。その原因として、次のような革命観があげられる。

革命の熟語は、支那の文字で支那は甲姓の天子が天命を受けて乙姓の天子の代る革命といふ……私共の革命はレヴオルションの訳語で、主権者の変更如何に頓着なく、政治組



織、社会組織が根本的に変革されねば、革命とは申しません(幸徳[1968: 526])。

ここでは根底からの変革を求めようとしたというinsurrectionとしての革命への意欲がわかる。また、易姓革命を懸念した范の革命観に通じる立場が見られる。1909年、幸徳は「直接行動と雖も一夜に革命を行ふと云ふのではない、即ち自覚を喚起し、団結を鞏固にする為に長月日を費すのだ」(幸徳[1975: 300])と呼びかけ、ゼネストで「人民の中に」行くという宣言を打ち出した。宣言のなかで、人民というのは都会の貧民と工場の労働者、地方の農民を意味すると同時に、これらの人々との接触を持つ学校の教員、医師、公務員、小商売を営むすべての人をも示している(ibid: 301-302)。このような思考には、彼の一貫した進化論認識からの影響が存在する。

近世社会主義は単に労働者階級の為にするに非ずして、総ての階級の為に図る者也、否な一切階級的区別より生ずる社会の害毒より脱出せんとする者也、社会全体の圓融無礙の進化を欲する者也(幸徳[1973: 162])。

大逆事件に巻きこまれる前になされた、「人民の中に」という最後の主張は、革命を起こすための自覚と連帯への視線が重なっている。それだけではなく、プロレタリア独裁と異なり、社会全体のための社会運動への意欲も想定できるだろう。まとめると、幸徳の直接行動論には、まず、ゼネストを相互扶助の一形式として資本主義・帝国主義をひっくりかえす傾向が存在する。次に、労働者のストライキをはじめに、社会全体に影響を与えようとした企てが存在する。そして、「人民の中に」というのは階級の対立を克服する連帯と対抗の形を模索し、さらなる社会的ゼネストを起こし、革命を起こすための

政治行動論とも言えよう。

#### IV.2. 征服の事実論

平民社で幸徳からの影響を受け、反軍的な雰囲気の中かで社会主義に接近し、さらにアナーキズムに傾いた大杉は、大逆事件後も帝国主義批判と直接行動論の立場を引き継いだ。彼は「無政府主義の手段は果たして非科学的乎」のなかで、アナーキズムを「個人主義の魂と社会主義の才とを化合して、最も新しく起つた大調和主義」(大杉[2015b: 310-311])として位置づける。そして、大杉はクロボトキン思想をふまえ、アナーキズムの科学性を語り、単線的な進化説と違って、「変種」と「突変」の側面から複線的な進化説を唱えている<sup>(30)</sup>。そのうえで、彼はエリゼ・ルクリュ(Élisée Reclus, 1830-1905)のことばを借りて、「進化とは生存する一切の物の限りなき運動」であると述べ、「進化と革命とは同一現象の相次ぐ二ヶの行為である」(ibid: 315-316)と、アナーキズムの革命観を総括している。すなわち、進化と革命の表裏の関係に基づき、社会進化と社会革命のダイナミズムが描き出されたとともに、平民社系の直接行動論も科学的アナーキズムの立場からさらに展開した。

1910年代の前半、大杉は征服の事実をはじめに、生の拡充と生の創造、生の反逆といった一連の論理を提起していた。これらの論理は、マルクス主義を含むアナーキズムの認識論を示すとともに、相互扶助の原理からアナーキズムの行動論を述べる。「征服の事実」のなかで、征服者と被征服者の相互関係という側面から、社会諸制度の形成がこう語られる。

征服だ！僕はこう叫んだ。社会は、少なくとも今日の人のいう社会は、征服に始まったのである。カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスとは、その共著『共産党宣

言』の始めにいつている。「由来一切社会の歴史は階級闘争の歴史である」と。けれどもこの階級闘争の以前に、またそれと同時に、種族の闘争があった。そしてそこに、この征服という事実が現われた。……征服者は常に被征服者を蔑視する。あらゆる方法を以て奴隷化する。被征服者もまた、仕方なしに服従しながらも、征服者の暴力以外の一切のものを認めない。……この両極の調和、というよりむしろ、征服者が本当に被征服者を征服しおおせんがために社会の諸種の制度が生れた(大杉[1996: 50-53])。

言い換えると、征服の事実とは社会の諸制度によって調和され、奴隷化と服従の現象の本源の暴力がもたらした社会事実をいうのである。また、「僕の現代社会観」のなかで、ブルジョアとプロレタリアートの対立にかんしては、近代社会における征服の事実が「極めて単純な形式に還元」されたというところから捉えられる(大杉[2014: 173])。こうした征服の事実からマルクス主義の唯物史観を包摂した思考は、一種の征服史観とも言えよう<sup>91)</sup>。大杉の征服史観は容易に生存競争と弱肉強食のような進化論につながっている。一方、アナーキズム的進化論の側面から、生存競争のほか、相互扶助の法則は提起される<sup>92)</sup>。そのうえで、大杉は「生という事、生の拡充という事は、いうまでもなく近代思想の基調である」と述べ、拡張のみならず、拡充を論じている。理想として、生存競争と相互扶助の法則は生の拡張と充実の両方を支えるが、征服の事実にとまって相互扶助が弱まった結果、近代において「被征服者の生の拡充はほとんど杜絶せられた」と指摘される(大杉[1996: 61-63])。

#### IV.3. 反逆としての創造

生の拡充が塞がっていたという窮地に直面し、

大杉はさらに「今や生の拡張はただ反逆によってのみ達せられる。新生活の創造、新社会の創造はただ反逆によるのみである」(大杉[2014: 131])と主張する。そのうえで、彼は反逆としての生の創造に基づいた新社会主義を提起し、紳士閥社会(ブルジョア社会)から独立した労働者のエンパワーメントを主張する。

より少なからざる重大の他の一面は、旧組織の中における新しき精神的力の発達である。……かくしていわゆる新社会主義は、「労働者の解放は労働者自らの仕事であらねばならぬ」という『共産党宣言』の結語を、まったく文字通りの意味に復活せしめようとした。……過去とは絶縁した、すなわち紳士閥社会の産んだ民主的思想や制度とは独立した、またそれらの模倣でもない、まったく異なった思想と制度とを、まず彼ら自身の中に、彼ら自身の団体の中に、彼ら自身の努力によって、発育成長せしめようとした(大杉[1996: 74-76])。

すなわち、生活における実行をつうじて、生の創造＝反逆の創出をいうのである。そのため、「運動には方向はある。しかしいわゆる最後の目的はない。一運動の理想は、……運動そのものの中に型を刻んで行く」(ibid: 77)という創造と反逆、進化と革命が交錯した新社会主義＝アナーキズムが打ち出された。

さらに、第一次世界大戦の勃発につれて植民地で頻繁に起きた「革命熱」を背景に、大杉栄は1915年に「事実と解釈」(後に「植民地の反逆」に改題した)のなかで「征服の事実を最も赤裸々に語る処である」植民地の「反逆の事実」を把握すること自体が「人類社会史の基調を闡明する事となる」と語る(大杉[2014: 234])。そして、彼はタバニー事件を含むアジアにおける植民地革命の動きに注目し、亜細亞和親会のようなトランスナショナルな連帯による相互扶助

に期待を寄せている(ibid: 242-243)。大戦後、日本における労働運動の分岐を背景に、彼はいわゆるアナ・ボル論争のなかでアナ系のリーダーとして自由連合を掲げ、生の創造=反逆としてのアナキズムを労働運動の場で求めている。また、ボル系の合同主義を「組合帝国主義」と非難したと同時に、大杉はクロボトキンの思考をつうじて、革命と反革命の絡み合いから脱出しようとした<sup>33</sup>。

彼等〔革命家〕は、それ〔革命家等の新しい世代の中に芽ざしてゐること〕が為めには、何よりも先ず、旧制度の代表者からその圧制の武器を奪い取らねばならない……あらゆる圧制の主要機関をたちどころに廃止しなければならぬ……住宅や生産機関や運輸の方法や又食料其他生活に必要な一切のものの(交換の社会化)して、社会生活の新しい形を始めなければならぬ事を知つてゐる(大杉[2015b: 393])。

この段落で、国家からいっさいの生産用具をプロレタリアートの手に集中するという「プロレタリアート独裁」の公式は、旧制度のあらゆる圧制の武器や機関の奪還に基づいた「交換の社会化」に代替される。進化と革命の表裏の関係をはじめに、征服史観を経て、生の創造―反逆ないし「交換の社会化」までの一連の論理から、大杉が語る個人主義と社会主義の調和としてのアナキズムの大筋がわかる。端的に言うと、征服の事実論に映し出された支配の暴力から、反逆の力をつうじて社会化を求める意欲までは、大杉思想に内在したアナキズムの暴力論の二重構造を反映する。

#### IV.4. 暴動的社会革命を求める

しかしながら、植民地主義批判の視野がまだ明確になっていないうちに、大杉は1923年関東

大震災後いわゆる甘粕事件で虐殺された。大杉の死を受け、中国で活動していた范は「大杉栄を追慕する」を公表して追悼の意を表したと同時に、北京と上海を拠点として展開した越境的なアナキズム運動のゆくえを模索しつつけていた。大杉思想における暴力論の二重構造を手がかりに、『新台湾』の宣言における「暴を以て暴に易ふる」という革命運動の動きへの懸念を検討すると、彼が民族自決運動とボルシェヴィズムの両方を拒否した姿勢には、大杉思想の親近性が見られる。

〔二十世紀の怪物たる侵略帝国主義が来た〕故に現代世界の凡ての被圧迫弱少民衆は我等の親愛な台湾同胞と同様に無聊悲苦に泣き迷信と暗黒に苦しみ、軍閥の残虐暴戾を受け専制政治の圧迫の下に資本家に迫害されてゐるのである。……是等〔アジアの民族自決、日本の普通選挙、台湾の議会請願などの運動〕は所謂暴を以て暴に易ふるの運動であつて、小敷〔少数〕資本家及有資階級の壟断と漁夫の利を占めんとする野心家が一種の群集革命心理を利用し、憐むべき民衆の財貨と血涙を犠牲とし私囊を肥やさんとする煽動に過ぎない(台湾総督府警務局(編)[1939: 880])。

范は世界中の弱小民衆が資本家と有資階級に利用された現象を懸念するとともに、「暴動的社会革命」を求めたアナキズムを表明している。すなわち、彼は大杉と同様に革命と反革命の絡み合いを意識し、回収されない革命を狙って「暴動的社会革命」を掲げている。また、ボルシェヴィズムの中央集権化について、范は「資本家の色彩を帯び」たマルクス主義と非難し、アナキストの決起を呼びかけ、科学的アナキズムを訴える。

此の科学的アナキズムは野蛮なる軍国主義

を剿滅し、四海同胞の世界主義は又二十世紀の怪物たる侵略的帝国主義を芟除し国際資本主義を烏有に帰せしめ得るのである。……そして大胆に命を賭して奮闘しなければならぬ。一切の権力を打破し、一切不自然の制度を推倒し一切の非科学的迷信を一掃せよ。然して労苦民衆の真正の幸福と被圧迫人の真正の自由の為に奮闘せよ(ibid: 881)。

この段落で、上記した幸徳の帝国主義批判の諸要素は抄録の形で提起される一方、「ブラザー・フッドの世界主義」としての「科学的社会主義」の理想は「四海同胞の世界主義」としての「科学的アナキズム」に変化した。そして、大杉の征服の事実論における社会の諸制度によって調和された本源的な暴力への警戒感、科学と人文の発達および帝国主義批判に基づき、「労苦民衆の真正の幸福と被圧迫人の真正の自由」を妨げた権力と制度、迷信への対抗姿勢として提示される。そのため、范が語る「暴動的」社会革命を掲げた科学的アナキズムとは破壊的な騒動にとどまらず、社会構造の根底からひっくり返すという「革命的」な行動をいうのである。すなわち、科学的アナキズムには大杉思想における暴力論の二重構造の軌跡が存在する。こうした幸徳—大杉—范の思考様式の連続性からみると、范のアナーキズムは『帝国主義』を原点に『神髓』から「征服の事実」へ推移しており、これは唯物史観から征服史観への移行を意味する。こうした范の思考様式はアンチインペリアリスト・アナーキズム(anti-imperialist anarchism)と捉えることができる。また、范が唱える暴動的な社会革命は、生の創造＝反逆の側面から易姓革命という征服の事実の反復(reproduction)を打開し、進化と革命のダイナミズムに乗って、植民地における反逆(insurrection)の創出を試みたものだったのでは

ないか。

## V. おわりに

幸徳秋水の『帝国主義』と『神髓』をはじめに、直接行動論と大杉栄が語る征服の事実をふまえ、范本梁のアナーキズムは『新台湾』の宣言のなかで世界弱小民族によるトランスナショナルな決起にたどり着いた。こうしたアナーキズムの思想史的一水脈を振り返ってみると、まず、幸徳の帝国主義論が根源的な問題認識として存在したことがわかる。次に、社会進化説をめぐる幸徳と大杉の言説は唯物史観から征服史観へという科学的社会主義から科学的アナキズムへの展開として范のアナーキズムに残っていた。このような視座は平民の連帯から発足し、直接行動論を接点に「人民の中に」の呼びかけを経て、暴力論の二重構造を内包した生の創造＝反逆の思考として植民地期台湾のアナーキズム運動で花開いた。

一般的に大杉にインスパイアされてアナーキズムに傾いたと言われる范の言動は、実に幸徳の帝国主義論から多大な影響を受けた。その思想史的意義として、1920年代台湾のアナーキズム運動の思想史の水脈を大正アナーキズムより早い段階で登場した明治社会主義と結びつけた点が挙げられる。また、幸徳思想と大杉思想の両方から植民地の状況を扱うという分析のアプローチは、東アジアの文脈から形成した帝国主義論を帝国・植民地研究に持ち込み、新しい視座を提供する。当局による危険な人物像から離れ、限られた資料を活用して植民地の反逆から見えてくる論理的な側面を描き出すことは、植民地期台湾のアナーキズムを語る一つの試みでもある。この意味で、本稿は幸徳秋水—大杉栄—范本梁の思想史的水脈からさらにコロニアル・アナーキズムを探究するポテンシャルを秘めているだろう。



## 註

1. 杉山[2012: 302-310]。
2. タパニー事件は1915年に台湾・台南のタパニーで起きた武装決起事件である。事件当時の運動家と農民等の拠点となった寺院から「西来庵事件」とも、あるいはリーダーの一人から「余清芳事件」とも言う。この事件は1930年代の先住民族による霧社事件をのぞいて、植民地時代の前半における最大な決起であり、漢民族系による最後の武装抗日でもある。事件にかんして、死者の総数はいまでも確認できないが、起訴された2,000人近くのなか、刑死者数は百人を超え、重刑が処された人数は800人に近かったという。また、地元の宗教を用いて組織を広げた手法などの理由で、宗教色が濃かったと言われるが、組織者の余清芳と横浜・神戸での直接行動グループとの交流はタパニー事件をもたらしただ原因の一つとしてあげられる。事件を知った大杉栄は1918年米騒動直前、台南蜂起のような勢いとしてサンジカリズムに期待していた。この点で、日本と台湾との直接行動論には相互作用が見られる（林他(編)[1976]）。詳しくは林他(編)[1976]、逸見 [1971: 200-209]及び逸見[1976: 5-23]を参照。なお、逸見 [1971: 200-209]及び逸見[1976: 5-23]には人名と地名について「余世芳」、「余精芳」、「水来庵」という誤字がみられたが、参照の際には適宜修正した。
3. 若林[1983: 75, 82-84], Wu[2003: 204-205, 288-289], 陳[2003: 144-145]。
4. 植民地台湾におけるアナーキズム運動についての研究は、ほとんどは台湾総督府警務局の記録に頼っており、人名や団体名などの基本情報レベルの叙述にとどまっている。そのなかでも思想史の先行研究としてあげられるのは、邱[2009; 2017]および、呉[2008]である。
5. この社会主義研究会は1907年に東京で劉師培らが結成した団体である。1898年に東京で安部磯雄と片山潜らが導き、1900年に社会主義協会に改組した社会主義研究会とは別物である。
6. Hwang[2016: 19-55], Wu[2003: 109-138]。
7. 逸見[1971], 呂[2016], 邱[2009], 廣畑[2013]を参照した。
8. コスモ倶楽部は、1920年社会主義同盟の結成をきっかけに成立した「プロレタリア政党の萌芽」としての思想団体である。初期の会員数は共産党系の暁民会とアナーキズム系の労働運動社、民本主義系の黎明会と新人会の人々を中心に、朝鮮と台湾、中国の留学生を加えておよそ百人ほどと言われている。1907年亞洲和親会の発足以来、ふたたび日中韓台と東南アジア諸国の運動家たちがともに帝国主義に抵抗したトランスナショナルな団体として評価される。アナ・ボルの対立が表面化して以降は、留学生と外国人運動家を主体におよそ二年間活動しつづけていた（松尾[2014: 413-448]）。
9. Hwang[2016: 19-55], 台湾総督府警務局(編) [1939: 876], 邱[2009: 79-80]を参照した。
10. 安社は「安那其社」(anarchist society)の略称である。1920年代中国語圏のアナーキズム運動では、「無政府主義」の訳語による誤解を招かないように、多くの場合anarchyの発音に近い「安那其」が使われていた。
11. 林他(編)[2006: 10]。
12. 外務省[1922: 132-135], 台湾総督府警務局(編)[1939: 877], 張深切[1998: 201-208]。
13. 邱[2009: 126, 137, 144-145]。ここで述べる三点はそれぞれ范が植民地台湾の文化啓蒙運動の機関紙『台湾青年』1巻5号と、1922年に中国の広州でアナキストとボルシェビキがともに創刊し、社会主義運動を支えていた『民鐘』1巻8号、獄中で書いた漢詩を台湾住民向けの『台湾民報』(1926年12月26日)に寄稿したものである。

14. 台湾総督府警務局(編)[1939: 878-882], 林他(編)[2006: 6-10]。本稿執筆の時点では『新台湾』創刊宣言の原文を確認できなかった。そのため、警務局による日本語訳文とその復文の正確性をさらに検証する必要があるが、原文と訳文、復文の間にすでに二次翻訳が存在する状況を配慮するため、本稿では引用の部分を警務局の訳文を採用する。
15. 幸徳 [1903: 15-20, 24-35], 台湾総督府警務局(編) [1939: 878-879]を参照。周知のように、『神髓』における社会進化の歴史を説明する「産業制度の進化」の章は唯物史観を明治期社会主義運動に紹介した代表作である。范は自身の叙述のなかで幸徳思想をたどりながら、植民地問題を論じているが、『新台湾』における宣言と『神髓』の両者には、その文体から親近性がみられる。また、幸徳の著作のほとんどは当時留学生だった趙必振と張継によって中国語に翻訳され、中国に紹介された。范が入手したものは日本語の原本と中国語の訳文のどちらかは確認できないが、亜細亞和親会の活動をふくめ、幸徳思想が大逆事件後も東アジアで広がっていたと推定できる(李 [2005: 93-116])。
16. 文脈によると、范が「国家主義」で描いたのは民族の対立に基づく国家間の対立であり、nationalism に近く、statismという意味での国家主義ではないと考えられる。
17. 范の宣言には幸徳の『帝国主義』の抄録とその書き換えが少なくとも六箇所ある。ここで引用した「少数人の国家……農工商人の自由組織の社会」の一文のほか、愛国心と軍国主義を論じる段落と世界主義を呼びかける段落にも『帝国主義』からの文がある。こうした思考の連続が何を意味するかという問題点にかんしては次の節で説明するので、ここでは范が『帝国主義』を参照した段落のみを示す。「自家愛すべし……これを名けて愛国心という」(29)、「然り戦争はただ猾智を較するの術なり……優者適者即ち狡猾譎詐に長ずる者独り存するのみ」(79)、「いわゆる帝国主義とは、……しからば即ち大帝国の建設は直ちに窃取強盗の所行にあらざるや」(85-87)、「彼らがいわゆる大帝国の建設や、…文明の扶植にあらずして他の文明の壊滅なり」(111-112)、「帝国主義なる政策は、……世界の文明の蠹賊なりと」(114)、「科学的社会主義は即ち野蛮的軍国主義を亡さんなり、ブラザー・フッドの世界主義は即ち掠奪的帝国主義を掃蕩消除することを得べけんなり」(117)。
18. 幸徳[2013: 117]。
19. 山泉[2013: 173]。
20. 絲屋[1979: 93], 大河内[1968: 415, 426-427], 塩田[1968: 563-564]。
21. Crump[2011: 143], 石母田[1990: 189-190]。
22. 幸徳[2013: 53-54]。
23. Ibid: 59, 71。
24. Ibid: 98-101。
25. 平野[1992: 87], 絲屋[1979: 166]。
26. 幸徳[1903: 24-28, 34-38, 40-47]。しばしば指摘されるように、幸徳の翻訳には、価値と価格というpriceとvalueの混同や、means of productionとmodes of productionをそれぞれ生産機関と産業制度に訳したという翻訳の欠陥が見られるが、認識としては簡潔で正確と評価される。
27. Ibid: 51-66。幸徳の具体案はアメリカ経済学者のイリー (Richard T. Ely, 1854-1943)の『社会主義と社会改良』によるものである。幸徳と違って、イリーは国家の介入をつうじて市場と社会問題の改良を行う主張で知られ、社会主義に批判的な姿勢をとっていた。それにたいして、『神髓』のなかで、幸徳はイリーの論説を部分的に引用し、書き直したうえで、国家介入なき社会主義を求めている。『神髓』の後半では社会主義

の具体案を載せているが、ここで取り上げた共有の概念とのかかわりについての説明も含まれる。端的にいうと、公有と国有の違い、「コンモン」の視点から見る公有、私有は社会主義の公有の概念に矛盾しないという三つの性質があげられる。前述した人類全体のものという意味での共有をふくめて考えると、共有・公有の視点から自由競争による弊害を解消したいという幸徳の企図もわかる。

28. Crump[2011: 18-19=2003: 222-223], 飛鳥井[1968: 266-270=1969: 205], 幸徳[1968: 429-435], 小松[1969: 426-431]。
29. 幸徳[1971: 326-348]。
30. 大杉[2015a: 314-315]。「無政府主義の手段は果して非科学的か」は大逆事件後刊行した浮田和民の「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義」への大杉の応答である。浮田自身は非立憲と非科学の観点からアナキズムを否定したとともに、合憲的かつ科学的社会主義、国家社会主義的政策改革を唱えた(浮田[1990: 256-274])。
31. 本稿の範囲を超えているが、梅森は同様に「征服史観」からアナ・ボル論争における認識論上の相違を扱う。詳細は梅森[2016: 244-245]を参照。
32. 大杉[2014: 145]。
33. 大杉[2015b: 368-370]。

## 文献

- 飛鳥井雅道 (1968) 「明治社会主義運動の帰結——直接行動をめぐる」『思想』 524: 263-282。  
—— (1969) 『幸徳秋水研究』 青木書店。
- 陳翠蓮 (2003) 「抵抗與屈從之外——以日治時期自治主義路線為主的探討」『政治科學論叢』 18: 141-169。
- 張深切 (1998) 「記烈士范本梁」『我與我的思想』 文經出版, 201-208。
- Crump, John (1996) “Chapter1: 1906-1911,” in *The Anarchist Movement in Japan 1906-1996*, UK: The Anarchist Federation, 13-30。  
—— (2011) *The Origin of Socialist Thought in Japan*, NY: Routledge。
- Dirlik, Arif (1991) “Introduction: Anarchism and Revolutionary Discourse,” in *Anarchism in the Chinese Revolution*. CA: University of California Press, 1-46。
- 平野義太郎 (1992) 「解題」『社会主義神髓』 岩波書店, 85-97。
- 廣畑研二 (2013) 「ギロチン社事件」『大正アナキスト覚え帖』 アナキズム文献センター, 39-55。
- Hwang, Dongyoun (2016) “Beyond independence: the dawn of Korean anarchism in China,” in *Anarchism in Korea: Independence, Transnationalism, and the Question of National Development 1919-1984*. Arif Dirlik(ed.), NY: State University of New York Press, 19-55。
- 石母田正 (1990) 「幸認秋水と中国一民族と愛国心の問題について」『石母田正著作集(15)』 岩波書店, 185-213。
- 絲屋寿雄 (1979) 「日本資本主義の成立と社会民主党の結成」『日本社会主義運動思想史』 法政大学出版局, 43-97。
- 逸見吉三 (1971) 「台湾独立運動に散った無名鬼」『現代の眼』 12(4): 200-209。  
—— (1976) 「日帝台湾に散った二つのアナ魂」『墓標なきアナキスト像』 三一書房, 5-23。
- 呂美親 (2016) 「日本統治下における台湾エスペラント運動研究」一橋大学大学院言語社会研究科博士論文。
- 小松隆二 (1969) 「『経済組織の未来』ほか——幸徳秋水とアナキズム」『幸徳秋水全集(7)』 明治文献, 419-438。
- 幸徳秋水 (1903) 『社会主義神髓』 朝報社。

- (1968)『幸徳秋水全集(6)』明治文献。
- (1971)『幸徳秋水全集(7)』明治文献。
- (1972)『幸徳秋水全集(1)』明治文献。
- (1973)『幸徳秋水全集(2)』明治文献。
- (1975)『近代日本思想大系(13)幸徳秋水集』筑摩書房。
- (2013)『帝国主義』岩波書店。
- 大河内一男 (1968)「反戦の書『廿世紀之怪物帝国主義』」『幸徳秋水全集(3)』明治文献, 415-428.
- 大杉栄 (1996)『大杉栄評論集』岩波書店。
- (2014)『大杉栄全集(3)』ぱる出版。
- (2015a)『大杉栄全集(1)』ぱる出版。
- (2015b)『大杉栄全集(6)』ぱる出版。
- 李京錫 (2005)「平民社における階級と民族——亜細亞親会との関連を中心に」『帝国を撃て——平民社100年国際シンポジウム』論創社, 93-116.
- 林書揚他(編) (2006)「新台湾安社」『台湾社会運動史(1913-1936) (四)』海峡學術出版, 1-10.
- 林衡道(編) (1976)『余清芳抗日革命案全檔第四輯第一冊』国史館台湾文獻館。
- 松尾尊兌 (2014)「コスモ倶楽部小史」『大正デモクラシー期の政治と社会』みすず書房, 413-448.
- 邱士杰 (2009)「台湾無政府主義者の活動」『1924年以前台灣社會主義運動的萌芽』海峡學術出版, 119-154.
- (2017)「日據時期朝鮮與台灣的無政府主義者交流——以申采浩與林炳文的活動為中心」『台湾研究集刊』150: 77-85.
- 塩田庄兵衛 (1968)「『社会主義神髓』他」『幸徳秋水全集(4)』明治文献, 549-564.
- 杉山伸也 (2012)『日本經濟史——近世・現代』岩波書店。
- 台湾総督府警務局(編) (1939)「無政府主義運動」『台湾総督府警察沿革誌』台湾総督府警務局, 875-895.
- Tierney, Robert T. (2015) "The Asian Solidarity Association," in *Monster of the Twentieth Century: Kōtoku Shūsui and Japan's First Anti-imperialist Movement*, CA: University of California Press, 115-131.
- 浮田和民 (1990)「社会主義及び無政府主義に対する憲政上の疑義」『近代日本思想大系(32)』筑摩書房, 256-274.
- 梅森直之 (2016)『初期社会主義の地形学——大杉栄とその時代』有志社。
- 外務省 (1922)「不逞団関係雑件 台湾人之部」『戦前期外務省記録』4.3.2.2-2外務省外交史料館。
- 若林正文 (1983)『台湾抗日運動史研究』研文出版。
- Wu, Rweiren (2003) *The Formosan ideology: oriental colonialism and the rise of Taiwanese nationalism 1895-1945*, Ph.D. dissertation. University of Chicago, Department of Political Science.
- 呉叔人 (2008)「反政治的政治——《黑色青年》無政府主義思想的研究筆記」『東亞世界中的日本政治社會特徵』中央研究院人文社會科學研究中心亞太區域研究專題中心, 109-138.
- 山泉進 (2013)「解説」『帝国主義』岩波書店, 157-180.

受稿2021年7月7日／掲載決定2021年11月23日



## Unravelling the Anarchism of Fan Ben-Liang from the Perspective of Intellectual History: Kōtoku Shūsui and Ōsugi Sakae as Methods

CHAN Ya-Hsun

Regarding the development of anarchism in East Asia during the post-WWI period, Taiwanese anarchism has barely been explored in most narratives due to the lack of materials. Amongst which, Fan Ben-Liang, a Taiwanese anarchist who was active in the early 1920s, and his New Taiwan Anarchist Society are constantly mentioned in the context of transnational anarchist movements, while his thoughts and ideas remain understudied. From the perspective of intellectual history, this paper establishes an analytical framework consisting of the Meiji theory of imperialism, the Taisho anarchism, and the colonial anti-imperialist anarchism. By probing into works of Kōtoku Shūsui and Ōsugi Sakae, it delineates a close relation between Kōtoku's *Monster of the 20th Century: Imperialism*, Ōsugi's discourses of the 'facts of conquest', and Fan's anti-colonial anarchism. Instead of focusing solely on the context of post-WWI anarchism, this paper indicates the anti-imperialist and anti-colonial characteristics prompted by the legacy of Meiji socialism in Fan's arguments. It is through this approach that this research contributes to filling in the missing piece of the existing narratives, and readdresses the potential of East Asian anarchism studies.